宿へ歸つてからも、正克は眼がチカ〳〵痛んだ。
（人を殺したりしたからだらう。）
と思つた。一人は殺したが一人は逃げて了つた。逃げた男がいまに大勢捕手を連れて來るだらう。
（俺の運命も迫つて來た。）
さういふ氣持はしたけれども、慌てゝ逃げ出すやうな氣持にはなれなかつた。何も彼も成り行き次第だ。それより眼の痛みの方がはるかに氣に掛つた。
汲んで來てある靈泉を金盥へ取つて根氣よくたでてゐると、次第に苦痛が薄らいで來た。すると今度は、其の痛い眼の中へお才の姿がチラ〳〵現はれて來た。
彼は突然人が入つて來たやうな氣配を感じた。眼をたで乍ら後ろを振り向いて見ると、いつの間にかお才が側へ來てゐた。
『おゝ、どうして爰へ來た。』

正克は咎めるやうに云つた。
『貴郎の後を隨いて參りました。』
『爰はお前の居る處ではない、歸れ。』
お才は動かなかつた。
『正克樣、貴郎は妾を憎い女と思つて入らつしやいませう。』
『何も憎いとは思つてゐない、拙者はお前を憎む理由はない。』
『否え、どれ程憎い奴と思はれても仕方がございません、妾が惡うございました、どうか妾を存分にして下さいませ。』
と云つてお才は泣き伏した。
正克の心の中には、お才を憎みたい氣持と、許したい氣持とが激しく戰ひ合つた。
それは兩方ながら正直な氣持だつた。
正克は默つて金盥の方を向いて眼をたで始めた。

『正克様、お眼がお痛みでございますか。』
『うん。』
『妾がたでて差し上げませう。』
お才は正克が持つてゐた布を取つて彼の眼をたでてやつた。もう正克はお才の爲すがまゝにしてゐる。
正克は其の時、お才に隱匿はれて銅座川の船底に三日も潛れてゐた時のことを思ひ出した。あの時毎晩お才が隱れて食物を運んで來て呉れた。初々しい娘であつたお才の姿が眼に浮かんだ。すると、現在側にゐるお才が、其の時のお才のやうに思はれて來た。彼は忽ち激しい愛情を感じた。それは暴風のやうに吹きまくる感情だつた。お才も正克も、夢うつゝの時間が過ぎた。
けれども其の歡樂は、正克の眼の痛みによつて散らされて了つた。正克は激しい痛みを訴へ出した。それはお才を愛した酬いだつた。

『そんなにお痛みでございますか。』
『うん、どうも痛んで堪らん。』
正克は、其の眼が潰れて了ふのではあるまいかと思つた。お才はオロ〳〵するばかりだつた。
『お才、わしはもう一度藥師の湯へ行つて來る。』
『それでは妾も參りませう。』
お才は帶を締め直しなどして正克と一緒に宿を出た。其處から藥師湯迄は五、六丁あつた。正克は幾度も石につまづいた。
『妾の手におつかりなさいませ。』
お才は手を差し出した。正克は其の手につかまつて歩いた。柔かな手から溫か味が傳はつて、それが全身に擴がつて行くやうな快感を受けた。
『お才。』

『はい、何んでございます？』
『わしとお前とは、不思議な縁だなあ。』
正克は感慨深げに云つた。
『正克様、妾はもう貴郎と離れませぬ。』
『然しわしは地の下に潜れてゐる人間だ、明日の命も知れぬ身だ。お前と一緒に暮らしことは出來ない。』
『否え、たとひ貴郎が明日殺されても妾は貴郎と離れませぬ。貴郎が死ねば、妾も一緒に死にます。』
お才は親兄弟のことも、グラバのことも念頭になかつた。愛する者は此の世に正克一人だけだ。彼女はこれまでの生活が全部虚偽であつたことを知つた。そして正克と一緒に最後の運命にまで行く決心をした。
小屋へ着くと正克は着物を脱いで湯壺の中を覗いて見た。すると、最前は釜四郎の血

で眞つ赤になつてゐた水が、いつの間にか、翡翠のやうに碧く澄んでゐた。正克は何も彼も忘れて靈泉に浸つた。
お才は小屋の外に立つてゐて時々中を覗いた。湯の中で無心に眼を洗つてゐる正克の姿が云ひやうなく痛々しかつた。
頭の上には岩石ばかりの山がそゝり立つてゐた。溫泉場の村や森が遠くに見えた。が暫らく經つと何處からともなく霧が流れて來て、忽ち村も森も隱れて了ひ、やがて直ぐ側の物まで朦朧とした灰色に包まれて了つた。

(八)

音藏は山の下へ走つて行つて、島原の奉行所へ報告した。奉行所からは直ぐ樣與力同心や數十名の下役が雲仙をさして急行した。
此の一行が溫泉場へ到着した時には、山上は一面の濃霧に鎖されてゐた。

役人達が正克の宿へ行つた時、正克は宿にゐなかつた。

『それでは、藥師の湯へ行け。』

其の同勢は霧の中を辛うじて、藥師の湯をさして進んで行つた。

×

正克は湯から上つた。お才は手拭で體を拭いてやつた。小屋の中まで白い霧が流れ込んでゐた。

『お才、霧が掛つてゐるやうだな。』

『はい、大變な霧ですわ。今迄こんな深い霧が掛つたことはありませんのに、一寸の間に何もかも見えなくなつて了ひました。貴郎、眼のお痛みはどうでございます?』

『大層樂になつた。此の湯に入つてゐる間は、まるで痛みを忘れてゐるのだ。』

『それなら精出してお入りなさつたら、直きに治りませうよ。』

そんな話しをしながら正克に着物を着せ、刀も手渡した。

外へ踏み出すと、實際霧が深くて何も見えなかつた。足許さへよく見えぬくらゐだ。

『正克様、妾恐くて歩けませぬ。』

『今度はわしにつかまつてゐるがよい。』

お才は男の體にしが付くやうにして歩いた。

十間……十五間……。

正克は不意に、白い霧の中にうごめく物を感じた。彼は本能的にそれが何者であるかを覺つた。

彼は無言でお才を後ろへ押しのけた。そして、地の上に蹲踞むやうにして前方を透してゐた。

と、突然大きな黑い物が飛んで來た。彼はスルリと潛り拔け乍ら腰の一刀に手が掛つた。

『エイツ。』

輕い氣合に、十分な手應へ、

『わツ。』

と云つて、黑い物はドサンと倒れた。溫かいしぶきが霧の中を走つた。

『アレー。』

お才の叫び聲が絹を裂くやうに聞えた。

周圍から無數の黑い物がムク〳〵と地から湧くやうに起つて來た。やがてそれは正克に迫つて來た。

激しい怒號や叫び聲が霧の中を右往左往した。捕手は續けて五六人斬り倒された。名狀すべからざる混亂。

霧は益々濃くなるばかりだつた。

ホテル・ハリマヤ

(一)

大浦の南海岸に『ハリマヤ』といふ、西洋人相手のホテルが出來た。ホテルと云ふとさも大形に聞えるが、實は居酒屋の毛の生えたやうなのが、近年澤山出來始めた此の邊のいはゆるホテルなのであつた。ハリマヤもさうした商賣の一軒であつた。一寸見掛けは洋館紛ひに出來てゐて、入口には扉が附いてゐるが、表の往來に向つた方は全部羽目張りで、一つも窓がないから、まるで倉庫みたいに見える。其の代り裏側の港に臨んでゐる方には、幾つも窓があつて、そこから港がまる見えだから、明るくもあるし、景色も好い。入口の方へ寄つた處に、帳場だの、小つぽけな料理部屋だのがある。其の階下

は全部土間で、テーブルや木製の椅子が並べてある。帳場の後ろの棚には舶來のビールの瓶が澤山並べてあるが、其の下には日本酒の樽も据ゑてある。

客種は、外國の水夫が上顧客だが、稀れには日本人の物好きもやつて來る。店にはお金にお島といふ二人の酌婦がゐる。彼女達は表面は酌婦だが、大概どんな要求にだつて應じる。さうした場合のために、二階には二つ三つの小部屋も出來てゐる。

亭主は、やがて四十にもなりさうな年配だが獨身者で、上海にでも居たらしく、頭をざんぎりにし、ダブ〳〵の洋服なんか着て、片ことの英語ぐらゐ使ふのであつた。然し、彼が何といふ名前の男だか、どういふ來歴の人間だか、殆ど誰も知らなかつた。家に使つてゐるお金お島でさへ、彼を呼ぶ時には『旦那々々』と云つてるばかりで、本名は知らないといふ呑氣さ、尤もそんなことは珍らしくもない話だが。

アメリカの水夫が五六人で來て、ビールを二十本以上も飲んで、馬鹿騒ぎをして、今し方引き上げて行つたばかり。お金とお島は、空瓶を片付けたり、テーブルの上を雑巾

で拭いたりした後で、隅つこの椅子へ並んで腰を卸して『ほツ』と一と息といふ體である。

『お金ちやん、もう今日はお客はこれでお終ひだらうかね。』

『お前さん、まだ日も暮れないんだもの、お終ひかどうか分るものかね。』

お島は夕陽を受けてゐる海の方を見乍ら、大きくあくびをした。

『おや〳〵、お退屈樣。』

『退屈もしようぢやないの。毎日々々毛唐人相手にビールの酌をしてゐたつて、何んにも面白いことがあるぢやなし、妾やつくづく此の商賣が飽き果てたよ。』

『それあお前さんばかりぢやないよ、妾だつて詰まんないことは同じだが、でも、こんなことしてゐるばかしで、月に五兩から稼ぎがあると思へば、一寸他へ行く氣になれないぢやないか。』

『それあお金ちやん、ビールのお酌をするだけぢやなく、毛唐人を二階へ伴れて上るか

らぢやないの。』

さう云はれるとお金は自分自身に恥ぢて赤い顏した。

『毛唐にもいろ〳〵あるさうだが、此の家なんぞへ來るのは下等な奴ばかりだから、まるで獸を客に取つてるやうなものさ。こんな厭な思ひをするくらゐなら、月に五兩になつたつて十兩になつたつて安いものだよ。おまけに今に彼奴らの惡い毒でも傳染されて御覽、こつちの體は滅茶々々になつて、末は乞食にでもなるか、のたれ死をして烏に食はれるやうな身の上になるんだよ。』

『お島さん、後生だからそんな話は止してお呉れ、妾や聞いただけでも恐ろしくて身顫ひが出るから。』

『ホホホホ、お前さんはほんとに臆病だねえ、話ぐらゐでそんなに恐がる人があるもんかね。今のはホンの冗談さ。眞實のことを云へば、何處で暮したつてまともものことが出來る妾達ぢやなし、毛唐人だつて同じ人間だもの、少しでも餘計お金の儲かる方が得と

云ふものだよ。お金さへ溜めりや、どんな好きな眞似だつて出來ようぢやないか。』

『ほんとにさうですよ。妾や早く百兩溜めたいと思ふんだけれど……百兩溜つたらこんな商賣は足を洗つて、田舍からお父つあんやお母さんを呼び寄せて、何か商賣でも始めようと思ふのよ。』

『お金ちやんはほんとに孝行者だよ。そこへ行くと妾なんか孝行したくても親はなし、何處で死んだつてい〳〵體だけど、矢つ張り未練があるからねえ——時に、旦那は何處へ行つたんだらう。』

『多分二階でせう、さつき上つて行つたきり、降りて來ないから。』

『二階でお金の勘定でもしてゐるのかしら——然し、うちの旦那ぐらゐ好い人はないねえ。あんな好い人がどうしてこんな商賣を始めたんだらう。』

『それあお前さん、お金を儲けるのは、誰だつて惡くないからさ。』

『かういふ家の主人といふものは、妾達のやうな女をいぢめて、どんな厭な客でも無理

無理取らせようとするものだが、うちの旦那に限つては、妾達が厭だと云へばきつとお客に謝絶つて呉れるし、常平常だつて、何くれとなく深切にして下さるんだから、妾やまつたくお父つあんかなんかのやうな氣がするのさ。さう思ふとあんまり我儘をしては濟まないと思ふけれども。』

『お島ちやん、お前さんいつそ、うちの旦那のお内儀にして貰つたらどう。』

『冗談お云ひでないよ、オヤ〳〵、お饒舌してゐる間に日が暮れかけて來た、今のうちにランプの掃除でもして置かうぢやないか。』

（二）

其の時、

『御免下さい。』

と云つて、表の扉を靜かに開けて入つて來た男があつた。

『入らつしやいまし。』

お島がお客だと思つて側へ行くと、

『私あお客ぢやありませんがね、當家の旦那がおいでだつたら、一寸お目に掛りたいと思つて參りました。』

『おや、さうですか、旦那はお在宅でございますが、あなたはどちら樣で。』

『名前を云つたつて御存じないから申しますまい。お目に掛つて御相談したいことがあつて參つたんですが。』

『では少々お待ち下さいまし。』

お島が二階へ報せに行かうとすると其の聲が聞えたのか二階から亭主が降りて來た。麻の古いダブ〳〵した洋服を着て、ざん切り頭をまん中から分け、毛唐人のやうに頬から顎へかけてモジャ〳〵髭を生やしてゐる。亭主は土間へ下りると、スリツパを突つかけて、店口の方へ行つて、

『入らつしやいまし、私が此處の主人で御座います、何か御用で御座いますか。』
『これは旦那で御座いますか、お初にお目に掛ります。實あネ、藪から棒でござんすが好い稼ぎ人を連れて參りましたから、抱へて頂き度いと思つて、其のことで御相談に上つたんで御座います。』
『稼ぎ人と仰しやると、女ですな。』
『さうですよ。』
『それあよくお出で下さいました。まあお掛け下さいまし。』
亭主は急に愛想が宜くなつて、帳場の側へ案内して客に椅子をすゝめ、自分も向き合ひに腰を掛けた。訪ねて來た男は、女衒ではなく、見た處堅氣ともつかず遊び人ともつかぬやうな風體である。
『實あ今家には、二人ばかり女は居りますが、かういふ商賣ですから、玉次第によつちやあ幾人置いたつて構はないんですが、其の働き度いと云ふのはどんな玉ですか。』

『玉は自慢ぢやないが上等なんで、何れお目に掛けやすがね。處で、飛び切り上玉ならどれ位金を張つて下さるでせうか。』
『さあ、そいつは代物を見ないと云へない話。それのみならず、大體私の家なぞは、遊女屋渡世と異つて、人の體を買つて了ふの賣つて貰ふのといふことはやらないんです。今居ります者も、自分の好き勝手に來て働いてゐるわけ、其の代り、稼いだだけは自分の物、とかういふことになつて居りますよ。若しお前さんが、年一杯の身賣りでもさせようといふお考へなら、丸山へでもお連れなさる方が早手廻しぢやありませんか。』
『否や、丸山……はちつと都合の悪い筋もあり、いはゞまあ爰だけのお話しですが、表向きでなく、體を張つて金を借りたいといふわけですが、それにはお宅のやうな御商賣が一番好いと思ひまして。』
『成る程、わかりました。さういふお望みなら、別に金を貸しては悪いといふ規則もないから、事と次第に依つてはお貸し申しもしませうが、一體どれ位お入用ですか。』

『百兩金が要るのですが。』

『へえ――百兩と云つちやあ中々大金、これが二十か三十なら、不見でいくといふこともあるが、百兩となつては、本人を見ないうちは御返事が出來ませんな。』

『御尤もです、お話が進めば今直ぐにも本人を連れて參りますが、それぢや旦那、玉さへ氣に入りや、百兩出して下さいますかえ。』

『出しませう、百兩でも百五十兩でも奮發しませうから、とにかく、本人を見せて下さい。』

『畏りました、ぢやあ善は急げで、今夜早速お目見得に連れて參りますから、どうか宜しくお願ひ申します。』

と云つて、其の男は暇を告げて歸つて行つた。

（三）

日が暮れると直きに其の男はやつて來た。約束通り女を連れて來た。

連れられて來た女はおみさだつた。

おみさはほんとに美しい女になつてゐた。

ハリマヤの亭主は、ランプの光でしげ〳〵おみさの顏だの姿を眺めて非常に氣に入つたらしかつた。そこで相談は一も二もなく纏つて、亭主は小判で百兩の金を持つて來て連れて來た男に渡した。

『それぢや、此の娘について、今後お前さんの方から何んにも苦情は出ないだらうね。』

『ヘイ、それあもう苦情どころぢやございません。どんな證文でも書きますよ。』

『いや、私の處ぢや證文なんぞは要らない、本人さへ承諾したら十分だ。』

『さうですか、私あ善七と申して、此の女の叔父になる者ですから、萬一何か事があれば直ぐ出て參ります。』

『時に善七さん、今度は私の方から、お前さんを見込んでお賴み申したいことがありま

すが、なんと相談に乘つちやあ下さるまいか。』
亭主は凝と相手の顏を見入つて云つた。
『へい、どんなお話しか知りませんが、私で出來ることなら何んだつて致しますよ。』
『早速承知して下すつて有難い。就いちやあ其の相談は家では一寸都合が惡いから、私と一緒に外へ出て貰ひ度いが。』
『へイ〳〵、何處へでもお供を致します。』
二人は直ぐ一緒に店を出た、亭主は海岸傳ひに南の方へ歩き出した。空にはうすぼんやりした月がかゝつてゐる。もう此の邊へ來ると一軒も家がなくなるから、從つて夜になると人通りは全く杜絶して了ふ。
『時に旦那、お話しといふのはどんな事ですか。』
『それぢやあ、此の邊でそろ〳〵お話しをしませうか。』
と云つてハリマヤの亭主は邊りを見廻し、海岸の岩の一つへ腰を掛けたので、相手も

一間ばかり離れた處へ、羽織をくるツと捲つて踞み込んだ。
『外ぢやないが善七さん、私はつい先頃迄上海に居ましてね。』
『どうやらそんな噂も伺つちやゐましたが。』
『それに就いて、大きな聲ぢや云はれないが、日本へ歸る時、外國の寶物を密り持つて歸つたんです。』
『エツ！　寶物を——？』
『お目に掛けりや分るが、素晴らしい寶物なんだ、それを或る處へ隱して仕舞つてあるんだが、私も金が要るから秘密に賣り拂ひたいと思ふのだ。』
『成る程。』
『けれども長崎には友達もないし、そいつを賴む人がなくて困つてゐるのだが、お前さんは、世間も廣いやうだから、何んと一つ骨を折つちやあ下さるまいか。其の代り、禮は一割だの二割だのとケチなことは申しません。儲けは山配けにしても苦情はないので

す。』
『そいつあ莫迦に面白いお話でございますね、宜う御座います。品物は何だか知らぬがきつと私が賣り込んで御覽に入れませう。』
『それぢやあ善七さん、確かに引き受けて呉れますね。』
『引き受けますとも、必ず此の善七が骨を折つて、賣り込んで御覽に入れますが、然し其の寶物は一體何處に隱してあるんですか。』
『隱してある場所は、向うに見える金鍔谷ですよ。』
『えつ？』
善七は吃驚して、思はず頭を廻して金鍔谷の方へ眼をやつた。すると相手は突如、
『ハハハハハ。』
と笑ひ出した。善七はあつけに取られた樣な顏をしてキヨトンと相手の顏を眺めた。
『善七さん——ぢやあない、蝦の源七、久濶だつたなあ。』

相手は飛び上つた。
『俺の名を知つてるお前は誰だ。』
『惡黨にも似合はねえ、物忘れのいゝ男だ、俺の顏や聲が分らねえのか、もつと側へ眼を持つて來てよく見ろ。』
『いや、いくら見ても判らねえ、俺あお前みたいな男は知らねえ。』
『さう決めてゐれあ世話はねえ、お前の方で知らぬと云ふのに、どうでも聞かせなくちやならぬといふほどの俺の名前でもねえから、默つてゐることゝしよう。處で源七、かうバラして了つたら、俺の用事も大概判つたらう。』
『用事つて、今の寶物の一件だらう。』
『ハハハハ、あんなこたあ皆口から出任せ出放題だ。』
『えつ。』
『よく驚く野郎だな、誰が寶物を賣るのに手前なんかを賴むもんか。俺の用といふのは

外ぢやあねえ、先刻預けた百兩をこつちへ返せと云ふのだ。』

『何んだとッ。』

『堅氣の娘を誘拐かして、天草邊りへ賣り飛ばし、又ぞろ其の女を長崎へ連れて來るなんて手前もよつぽど厚顏しい野郎だ、手前なんぞに呉れてやる金はないから、サツサと金を返せ。』

『ふざけたことを吐すない。どうも様子が變だと思つたが、手前は何處の馬の骨だか知らねえが、蝮の源七を見そくなやがつたか。』

『四の五の云はずに返さねえか。』

と、靜かに岩から離れた。

『何をッ。』

源七は匕首を逆手に持つて一突きとばかりに飛び掛つた。

『あッ?』

其の時源七は眼の前に白く光る物を見て立ち竦んで了つた。拳銃だ。

『さあどうだ。』

源七は振り上げた匕首を下しもならず、彼が一生に一度の悲愴な表情を見せて相手の顏を見詰めてゐたが、其の時彼は初めて何ものかを其の中に發見したらしかつた。

『やツ、手前は!』

源七がさう叫んだ瞬間、相手の指が引き金をひいた。

『あツ!』

拳銃の音と、煙硝の匂ひの中で源七は仰向きにバツタリ斃れた。然し源七はまだ死なかつた。彼は虛空を摑み乍ら、呻き聲の中で何事か云つてゐた。

『ウーム……播州……傳吉……ウーム……』

それが彼の最後の言葉だつた。

夜嵐

（一）

殘暑はきびしいが、もう夏は終りになつて、蟬の聲に何んとなく力が乏しく、路傍の叢には薄の穗が長く伸びてゐる。

最早日暮れ近い頃、茂木街道を長崎の方へやつて來る一人の武士があつた。編笠で顏を隱し、袴の股立ちを取つて、脚絆草鞋ばきといふ旅姿。

其の前を、一人の男の巡禮が歩いてゐる。武士が巡禮に追ひ着くと、巡禮は道を避け乍ら、

『お武家樣、もう長崎は近う御座いませうか。』

と、訊ねた。武士も足を緩めて巡禮の方を見た。

『此の峠一つ越したらもう長崎ぢや。』

『ヤレ〳〵左樣で御座いますか——ではいよ〳〵長崎が見られますなあ。』

其の言葉がいかにも感慨深く聞えたので、武士も思はず吊り込まれたと見えて、

『お前は長崎は初めてか。』

『ハイ、生れて初めてゞ御座います。』

『何處から參つたのぢや。』

『ハイ、私の生れは東國の者で御座いましたが、若い時から大阪へ參つて暮して居りました。』

あう云ふ巡禮の男はまだ三十臺か、四十には手が屆きさうもない屈竟の男である。武士のはうはそれつきり默り込んで歩いてゐたが、巡禮は後からついて來乍ら自分の身の上話を聞かせるのだつた。

『大阪で女房を持ちましたが、其の女は長崎の生れで御座いました、關東生れの私と、長崎生れの女と夫婦になるなんて、お武家様の前ですが、縁といふものは妙なもんぢやあ御座いませんか。』

『お前の女房は今も達者でゐるのか。』

『それが旦那様、去年の秋死にました。』

『それは愁傷なこと。』

『八年も一緒に暮して居る間、つひぞ一度風を引いたこともなかつた奴で御座いますがフトした病氣で床に就くと、一月ばかり病つてポツクリ死んで了つたんでさあ。人間の命なんて莫迦なもんですよ。私あツク〳〵世の中が厭になりましてネ、女房の百ケ日だけ濟まして、世帶を疊んで四國遍路に出ましたが、八十八ケ所も廻つて了ひましたから今度は女房の生れた長崎といふ土地を見たくなつて、それでかうしてやつて來たわけで御座います。』

武士は河野正克だつた。

巡禮の男の話が妙に正克の胸を撲つた。

（死んだ女房の幻影が此の男を長崎へ引き寄せるのだ——）

正克を長崎へ引き寄せるのは、生きてゐるお才の幻影だつた。

正克の眼病は大分快くなつてゐるらしかつた。

峠へ登り詰めると、長崎の町が見えた。正克は脚を速めて巡禮より先に坂を下りて行つた。彼の前を職人體の男が二人づれで話し乍ら歩いて行つた。

『それぢや其の武士は此處で腹を切つたのかい。』

『さうなんだ。あの松の根方へ腰を掛けて腹を切つたんだ、見なさい、これが名代の俵屋地藏だから。』

『へえ——さう聞くと妙に簿氣味の惡い氣がするな、それで、其のお才といふ女はどうしてゐるんだらう？』

『お才はグラバの持ち物になつて、榮耀榮華をして暮してゐるのだ。』
『それぢやあお侍ひとり馬鹿を見たんだなあ、女は外面如菩薩內心如夜叉と云ふが、恐ろしいものだなあ。』
『まつたくだ、だからあんまり女にや惚れない方が無事だらうぜ。』
『惚れたいにも、こちとらは相手がないから大丈夫だ。』
『違ひない、ハハハハ。』
『ハハハハ。』
聞くともなしに其の話が正克の耳へ入つた。
(民彌が腹を切つたのは此處だつたのか――)
正克は俵屋地藏の前で足を停めた。
初めて長崎へ出て來た時、風頭山から民彌と二人で長崎の町を見乍ら話しをした。あの時の光景がまざ〳〵と眼に浮かんで來た。二人が、草の上に足を伸ばして話しをして

ゐる前をお才が通つた。――たゞそれだけの、知らぬ同志の眞に偶然の出逢ひに過ぎなかつた、其の次の瞬間には、あんな夢想だにしなかつた事件が突發して了つた。それがために、自分の運命はメチヤ〳〵に破壞されて了つたのだ……と思つてゐたが、あの時何んの關り合ひもなかつた藤岡民彌が、同じ女の行き掛りからあんな慘めな最期を遂げたことを考へると、正克は云ひやうない奇異な感にうたれた。
『民彌は氣の毒だつたなあ――』
彼は心から死んだ友達を氣の毒に思つた。生きてゐる時の妙な反感や嫉妬は跡方もなく拭ひ去られてゐた。
『南無阿彌陀佛――』
正克は松の根方に向つて知らず〳〵其の言葉を發した。

(二)

お才は獨りで物思ひに耽つてゐた。

ランプの光に照らされてゐる彼女の顏はひどく窶れてゐた。あの張り切つた皮膚の輝きは元の儘だが、燃えるやうな情熱の瞳は、深い悲しみのために疲れ切つた色をしてゐる。

滿庭の蟲の聲――。

お才は蟲の音に耳を澄ましてゐた。知らず〳〵泪が頰を傳つて流れた。

（妾は何んと業の深い女だらう――）

自分故に、有爲の若い男を二人までも身を誤まらせて了つた。よしそれが自分の心から仕向けたことではないといつても、どうして罪をまぬがれることが出來ようぞ……。

（いつそ尼にでもならうか？）

さう考へることも時々ある。然し、自分のやうな女が尼になつたところで、此の深い罪の償ひが出來ようとは思はれない……。そんなことを考へる直ぐ後から、正克戀しさ

の氣持が潮の如く押し寄せて來るのだ。

（正克樣は何處に居るだらう？　もう一度あの方に逢ひ度い――）

と思ふと、わけもなく胸が迫つて來るのだ。

コツ〳〵と扉を叩いてグラバが入つて來た。

『お才、あなたはまだ起きてゐたのか。風でも引くといけないから、早く寢んだはうがいゝよ。』

葉卷を手にしながらグラバは椅子に腰を掛けて云つた。

『でも、虫の音が大變美しくて、寢るのが惜しいくらゐですわ。』

『なるほど、此の部屋にゐると大變よく聞えるねえ、もうすつかり秋だよ。』

『旦那樣はまだお寢みなさいませんか。』

『私は今夜は調べ物があるから、まだなか〳〵寢られないのだ。』

『それではお茶でもいれて參りませうか。』

『いや、茶も欲しくない――時にお才、お前は此の頃少し變だネ。』
『アラ、どうして？』
『どうしてつて、一體に變だよ。お前は何か心に悲しみを持つてゐるやうに見える。』
『妾、何も悲しいことなんかございませんわ。ホホホホ。』
『お前の其の笑ひが、私には泣いてゐるやうに聞えるよ。』
『えゝ。』
『ハハハハ、さう聞えると云つたゞけだ。聞いて御覽、あの虫の聲も、聲は無心に鳴いてゐるのだが、聞き手の心持次第で、悲しみの聲のやうにも、歡びの歌のやうにも聞えるぢやないか。それではお寢み、私はもう少し仕事があるから。』
グラバは起つて側へ來て接吻を求めた。お才は男の頸へ手を掛けて唇を與へたが、さうした習慣的のことまでがお才には何んとなく苦痛の種だつた。それは雲仙以來の、彼女の心持の變化だつた。

敏感なグラバがそれを悟らないでゐるわけはなかつた。お才は自分のしてゐることが全部虛僞であるやうな氣がして、グラバに對して心苦しかつた。
お才は窓を閉め、カーテンをおろして、ランプの火を吹き消して床へ入つた。けれどもなか〳〵眠り付けなかつた。蟲の音は一時は聞えなくなつたやうに思つたが、それはたゞ遠くなつたばかりで、暫らく經つと再び元のやうに聞えて來た。
外には薄月があると見えて、カーテンの隙き間から微かな白いものが差してゐた。

（三）

可成り大きな山全體を取り入れてある廣大なグラバ氏の邸内には、築山や、泉水や、細徑や、亭や、さうした東洋的な庭園技術を施してあるかと思ふと、其の山上の平地には一面に姫芝を植ゑてあつて、有名な一本松が玄關脇にくろ〳〵と空にそびえ、蘇鐵が處々に立つてゐる。

何處から忍び込んだのか、一人の怪しい人物が其の邸内へ入つてゐた。曲者は闇の間を縫つて建物の周圍を窺つて歩いた。

やがて彼の眼に、ガラスの窓越しに外へ流れる光線が映つた。

曲者は壁に添つて窓の下へ行つた。室内からの光に照らされた其の顏を見ると、それは河野正克だつた。

廣い部屋には、幾つもの椅子や、ソファーや、油繪の額や、其のほか種々の美術品や骨董などが、それ〴〵高價な輝きや澁い落ち付きを見せて飾られてあつた。

其の部屋で、大きなテーブルの上に一枚の地圖を展げ、ランプの光でそれを見詰めたり、鉛筆で地圖に何か書き入れたりしてゐるのはグラバだつた。

グラバは、仕事に夢中になつてゐるので、邊りの蟲の音が俄かに止んだことも氣が付かなかつた。

正克は、この邸に忍び込んだのは、お才に逢ひ度いと思つたからだつた。會へなけれ

ば、人知れず垣間見るだけでもいゝと思つた——と云ふより實際は、只何んといふこともなくお才に惹き付けられて爰へ來たのである。

彼はお才に逢ふことは出來ず、計らずもグラバを見てしまつた。彼は息を殺してグラバを見てゐるうちに妙な氣持になつて來た。此の紅毛碧眼の異人がお才を自由にしてゐるのだと思ふと、云ひやうない嫉妬が胸にこみ上げて來た。彼は以前から攘夷思想を抱いてゐたが、それは此の時代に共通した政治上のイデオロギーであつた、個人的に外國人を憎惡する程それほど沒分曉漢ではないのだ。然るに今グラバが烱々たる眼を光らせて地圖を見入つてゐる姿を見ると、それが日本の國土を奪ふ計畫をしてゐる惡魔のやうにも見え、更に自分の戀人を掠奪はれた憤りが、全身的に爆發して來るのを感じた。

彼の、行き詰つてしまつてゐる運命が、彼を狂暴なすて鉢の檻の中へ叩き込んだのでもあつた。

（此の異人を殺してやらう。）

彼はさう決心すると、直ぐ様入口を求めて探したが、それはさう骨を折るまでもなく一つの窓の扉が開放されてゐたので、何の苦もなく飛び込むことが出來た。

ガタン――と、深夜に響いた物音でグラバは窓の方を見た。其の途端に飛び込んだ兇漢は、一瞬間の躊躇の後、腰の刀を拔き放つて、無言の儘猛然と襲ひ掛つた。

『あ！』

グラバは低い叫び聲を擧げたが、それは驚愕や恐怖の聲ではなかつた。彼は格別顏色も變へずにつと立ち上ると、テーブルに片手を載せた儘、敵を避ける身構へをした。

正克は、一刀を上段に振り冠り乍ら近付いた。グラバは敵の歩調に合せて後退りしながら、テーブルの周圍を半分餘り廻つた。

正克が、テーブルを飛び越えて斬り付けようとした瞬間、グラバの手は拳銃を摑んで前へ差し出した。

『あなたは誰です。』

グラバの聲は低いけれども力があつた。

『……』

『あなたは幕府方から賴まれた人ですか。』

『違ふ。』

『私の命は渡すことは出來ません、あなたが去らなければ擊ちますぞ。』

『……』

正克は絕對絕命だつた。彼はグラバの銃彈に命を陷す覺悟で相手を斬らうと決心した。

其の時、急に扉が開いて、お才が入つて來た。

『あツ！』

此の光景を見るなり、お才の口から異樣な、鋭い叫び聲が發た。彼女の面上には悲痛極まりない表情が現はれた。

彼女は此の夢想だもしなかつた恐ろしい破局を、どう取りさばいたらいゝか、何んに

も考へる餘裕はなかつた。お才は夢中で二人の中間へ走り込んだ。

『いけません〳〵、妾を撃つて――妾を斬つて――』

彼女はわが胸を抱き締めて絶叫した。

『お丶……』

正克はお才を見ると、よろ〳〵とよろけて、振り上げてゐた刀をおろした。寢亂れ姿のお才は、美しいといふよりもむしろ悽慘其のものだつた。

正克は全身の闘志が一度に拔けて了ふのを感じた。彼はガラリと刀を投げ捨て丶グラバに向つて云つた。

『グラバ、拙者を撃て。』

『旦那様、撃つてはいけません。』

お才は正克の前に立ちふさがつて、自分の身で彼を庇つた。烱眼なグラバは、一切の事情を見拔いて了つた。

『あなたは、河野さんといふ方ですか。』

正克はグラバが自分の名を知つてゐることを不思議に感じ乍ら、

『さうです。』

と答へた。

『それなら、此の婦人はあなたのものですから、連れてお立退き下さい。』

グラバは拳銃をテーブルの上に置いて、冷靜な口調で云つた。其の言葉に正克は何んとも云へない羞恥を感じた。

『拙者はそんなことは考へてゐない。』

『否や、あなたがどう考へてゐると、ゐないとに拘はらず、此の婦人はあなたを愛してゐるのです。だから、私に遠慮なく、連れて行つて下さい。』

正克は此の異人の意外な言葉に益々強い衝動を感じた。

『然し河野さん。あなたは幕吏に追はれてゐる體でしたね。』

『さうです。』

『それでは、此の婦人を伴れて逃げることは不可能でせう。』

『拙者は一身の置き處もない身の上です、どうして女など伴れて行く處があらう。』

『それでは當分私の宅に潜れてゐるがいゝです、もう一週間經つと私の所有の汽船がヨーロッパへ航海するから、それへ乘つて外國へ行かれるのが一番いゝ方法です。無論此の婦人も同道で。』

正克は慚愧の念にうたれて、次第に頭をうなだれて了つた。

グラバは椅子に腰をおろし、何等の興奮を交へぬ靜かな言葉で語つた。

『河野さん、今日本では攘夷は一つの正義として信じられてゐるけれども、此の思想は間もなく廢る時が來るでせう。其の時こそ日本が初めて世界の舞臺に登場する時です。日本魂——これこそ日本の正義です、世界に向つて此の國體と、日本魂を發揮する時代が來ることをあなたは信じようとしないのですか——私はあなたの爲に惡いことは云

はない、外國へ行つて勉强なさい、そして、日本の次の時代に働く人になつて下さい。』

『グラバさん、あなたはよく拙者の盲を開いて下すつた。河野正克初めて夢が醒めました。』

正克は顏を擧げて云つた。

『河野さん、それでは私の忠告を容れて、外國へ行く決心をなさいましたか。』

『いや、グラバさん、貴下の御深切は感謝しますが、それでは拙者、餘りに恥を知らぬ人間になります、拙者は拙者の運命に任せることにしませう。』

『然し、それでは此の婦人はどうなります。』

『お才どの、そなたはいつ迄もグラバさんのお世話になるが宜い、拙者はもうお目に掛らぬ。』

さう云つたと思ふと、正克は身を翻へして窓の側へ飛んで行つた。

『あ！　正克樣？』

お才は走り寄らうとした。

『グラバさん、お才どの、さらば――』

正克は輕々と窓から飛び出して、何處ともなく姿を沒して了つた。

（四）

ホテル、ハリマヤは大勢のマドロスが入り込んで割れ返るやうな騷ぎだつた。酒の香と煙草の煙が、其の中に渦卷いてゐる。

亭主はニコ〳〵顏で帳場からそれを眺めてゐる。三人の女達は、方々のテーブルを廻つて酌をすることに忙しかつた。

おみさは外國人の言葉は一言半句も解らないからマゴつくばかりだつた。そればかりでなく、彼女の眼には異人といふものがすべて恐ろしくばかり映つた。天草で客を取る商賣はして來たけれども、それは皆日本人ばかりだつた。

お金やお島の話によると、此の家でもやはり外國人を二階へ上げるのださうだ。

（どんなことをされるだらう？）

と考へると體が縮まる程恐ろしかつたが、幸ひ彼女はまだ其の恐ろしい目には遇はずにゐる。

けれどもおみさは、源七に連れ出されて天草から此處へ住み替へたことについては、むしろ喜んでゐた。それは此の家の旦那が何んとなく深切らしい人であることや、朋輩のお金やお島も意地の惡い女でなさゝうなことも一つの原因ではあるが、それよりもものつと痛切に彼女を喜ばせてゐることは、故郷の四郎島が直ぐ眼と鼻の間に見えてゐることだつた。懷かしい其の島の姿を見た時彼女の心はいかに歡喜に躍つたであらうか。彼女はすでに島へ歸つたやうな氣持がした。

其處には片時も忘れたことのない父親や母親が居るのだ、我が家がある、豚や鷄が遊んでゐる。靜かな深い入海、お寺の屋根や石段――。島中のあらゆる光景が、其處から

は見えないけれども、彼女の眼にはハツキリと浮かぶのだ。

おみさは嬉しくて息が止るほどの興奮や感激に浸るのであつたが、さて、それ程懐かしい故郷なら羽を付けて飛んでも行きたいくらゐに思ひさうなものだが、どうしたわけか行き度いと思はなかつた。

『こんな體になつて行かれはしない――』

故郷を考へる時、いつもおみさの心から溜息と一緒に漏れる言葉だつた。

恍惚とした眼で島を眺めたり、そんなことを考へたりする暇のあるのは晝間の一時だけで、客が來れば、ましてや夜になればいつも此の通りの騷ぎだから何を考へる餘裕もなかつた。

一人のアメリカのマドロスは、おみさを膝の上に載せておもちやにしてゐたが、やがて帳場へ行つて亭主と、おみさを二階へ伴れて行く交渉を始めた。

『折角だが、彼はまだ生娘ですからね。』

亭主はずるさうにニヤ〳〵笑つてゐた。

『おい大將、いつたい幾許出せつてえんだい。』

さう云つて片方はズボンのポツケツトへ手を突つ込んで銀貨をヂヤラ〳〵音をさせた。

結局其の交渉は成立したと見えて、其の男はニコ〳〵笑ひ乍らテーブルの方へ戻つて來ると、いきなりおみさを背後から抱きすくめて階段の方へ伴れて行かうとした。おみさは吃驚してもがいた。

『あれ――』

邊りの者はそれを見ても至極平凡な事が起りつゝある時のやうに、特別の注意を向ける者もないのだつた。

おみさは小鳥のやうに巨きな腕の中でバタ〳〵するだけだつた。が、其の時、全く別個の事件が突發した。それには、其の時家の中にゐた全部の者が愕いて、總立ちになつたほどだつた。表から、一人の武士が、砲丸のやうに飛び込んで來たのだつた。すると

直ぐ其の後へ續いて多數の捕吏がハリマヤの店へ雪崩れ込んで來た。奉行所の御用提灯が渦卷いた。

逃げて來た武士は正克だつた。正克は店の一番奥の方迄走つて行くと、其處でクルリと向き直つて、刀の柄に手を掛けて待ち受けた。

客は沸騰した。逃げ出さうとしても、入口に一杯になつてゐる捕吏にさまたげられて飛び出すことが出來なかつた。家の中は只混亂に混亂した。

おみさを二階へ伴れて行かうとした男は、此の俄かの騒動でおみさを階段の中段へ卸して自分もボンヤリと其の光景を眺めてゐた。おみさはあツと驚きの聲を立てた。

おみさよりも早く正克であることを知つて驚きの色を現はしたのが、ホテル・ハリマヤの亭主だつた。

然し、おみさにしても亭主にしても、此の場合手の出しやうはないから、只固唾をのみ乍ら、傍觀してゐるより外はなかつた。

捕吏は十人ばかり先頭に立つて、ジリジリと階下の中程迄進んで來た。

其處は前にも述べたやうに家の外は直ぐ海で、二間程の高さのある崖の下には畫間見ると深碧の海が迫つてゐた。窓は開け放たれてゐる。

(海へ飛び込めば逃げられるかも知れない)

と正克は突嗟の間に考へたが、どうしたものか彼はもう逃げる氣がなかつた。逃げると云ふより、さうして生存を續けたいといふ慾望がなくなつてゐたと云ふほうが中つてゐた。

『御用々々。』

捕吏のかたまりは益々近く迫つて來た。それ迄正克は柄を握つてゐたが、相手が二間ばかりの距離に接近した時、突然サツと刄を拔き放つた。

『あ!』

捕吏は思はず動搖した。けれども、其の次の瞬間には人々は全く豫期しなかつた光景

を見せ付けられたのだ。

正克は、拔いた刄を逆に取り直すが否や、ぐざとばかり我が咽喉へ突き立てた。

『あつ！』

人々は譬へやうのない驚愕の聲を擧げた。

正克は、刄を突き立てた儘、一歩二歩よろめいたと思ふと、窓から體を乘り出して、眞つ逆様に海の中へ落ちていつた。

狂亂

（一）

時代は大きく廻轉した。

日輪は東の水平線から勢よく立ち昇つた。

すると、それ迄暗澹たる闇に閉されてゐた世界に、俄然輝やかしい光明が滿ち溢れ吹きまくつた暴風の名殘も今は留めず、平和と幸福の外、何ものもなかつたやうに見えた。

人々は過去の夢を追つてゐる暇はなかつた。かゝる急激な變動に際して、人々はそれぞれ己の立場を如何に處すべきかについて考へるだけで有り餘る重荷だつた。

長崎も、すべてにおいて一新された。

グラバは、新政府が成立すると、其の顧問格として東京へ呼び寄せられた。それは彼の從來の功績から見ても當然であつたと同時に、新政府の建設事業に對しても、彼の知識と手腕とを必要とする方面は多々あるのであつた。

お才は、其の時分にはグラバとの關係が斷たれてゐた。大浦のグラバの邸宅は依然として其の儘で、時々主人が東京から歸つて來た時には華やかな場面がしば〳〵其處で展開されたにもかゝはらず、人々はお才の姿を見ることはなかつた。世間ではお才とグラ

バとの絶縁について種々噂をしたが、それはみな想像から出た話で、眞實の事情を知つてゐる者は殆んどないと云つてよかつた。

異人殺しの犯人と見られた若い浪人が、捕吏に追跡されて自刄の後海へ飛び込んで死んだ事件などは、直きに人々から忘れられて了つた。況んや其の事件をお才やグラバの身の上に結び付けて考へて見ることなどは、誰しも想像以外の問題であつた。

世間は、お才自身をもあまり噂に上せぬやうになつた。それは世間といふものゝ忘れつぽさを示してゐると同時に、すべてのものは、それ自身の持つ境遇に依つて、有名になつたり消えて失くなつたりするのである。グラバに依つて噂の絶頂に登り詰めたお才が、グラバから捨てられた後は火の消えたやうに忘却されたからといつてあながち不思議ではない。

けれどもお才と親しくしてゐる者は、彼女が銅座の家に歸つて、グラバと別れる時貰つた手切金によつて比較的氣樂な生活を送つてゐることを知つてゐた。

春であつた——。

長崎の港を繞るあの山々は俄かに綠の色が濃くなつて、海は眞球のやうに鈍く輝き始めた。

遲咲きの山櫻が、處々林の中に殘つてゐる風頭山の小徑を、たゞ獨りで歩いて行くのはお才だつた。

銀杏返しに結つた其の横顏はいくらか窶れてゐたが、乳色の肌には紅い血潮がさし、夢見るやうな眸には昔ながらの魅力があつた。

其の邊の山や道の樣子は何年前も今も變りはなかつた。なだらかな傾斜の草原があつて、其の前を一筋の小徑が通つてゐた。

(此處だつた。)

お才は其の草原の上に、若い二人の武士の姿をマザ〳〵と浮き出させた。

(あれから何年經つだらう!)

と指折つて數へて見ると、もう五年前の出來事だつた。

お才は暫らく其の場に佇んでゐたが、やがて又歩き出した。險しい坂を登つたり、小暗い林の中を拔けたりして進んで行くと、山間へ出て、それを一丁ばかり進むと見覺えのある玄妙堂の屋根が繁つた樹木の中にあつた。

小鳥の啼く聲が頻りに聞えて、それが反つて靜寂な感じを強めた。

窖のやうな感じのするお堂の樣子も昔とちつとも變つてゐなかつた。入口から覗いて見ると、祭壇に微かに燈明をとぼし、線香の匂ひが強くする中で、庵主は圓座の上に坐つてゐた。

（お勤めの最中なのかしら？）と思つたが、お才は、

『御免なされませ。』

と聲を掛けると、

『どなたぢや。』

『妾は、御祈禱をして頂き度くて參りました。』

『おゝ、お前さんは五年あとに妾へ來た人ぢやな。あの病人はまだ其の儘かな。』

『はい……此の頃メツキリ力が失くなつてしまひました。』

『よし／＼、御祈禱をしてやるから坐んなさい。』

お才は玄妙さんの背後へ坐つた。玄妙さんは新しく線香を上げて經文を讀み出した。御祈禱は可成り永い間かゝつて漸う終了つた。

『有難うございました。』

お才は包んで來た物を線香針の側へ置いてから、庵主に向つて頭を下げた。

『玄妙樣、妾は澤山罪を重ねました、妾はこれからどうなるでございませう？』

『お前さんのために、地獄へ陷ちてゐる人間が二人あるのを、御存じか。』

『……』

『其の人達の現在の姿をお前さんに見せて上げよう。』

玄妙さんは暗い壁の方を指さした。

炭のやうに黑い闇の中に、鉛のやうな鈍い光が浮き出し、其の中に何物かの物體があるやうにお才には感じられた。やがてそれがハツキリと見えて來た。それは血みどろになつて相闘ふ二人の男の姿だつた。正克と民彌である——。

『あツ！』

お才は突つ伏した。

お才はヒヨロ〳〵した足取りで玄妙堂から出て來た。

『正克様——民彌様——』

彼女は空に向つてさう呟いた。

彌生の太陽は、先刻お才が行く時と變りなく照つてゐたし、小鳥も同じやうに囀づてゐるが、お才の眼には明るい太陽も映らず、小鳥の聲も耳に入らないやうであつた。彼女の眼は潤ひなく一つ所を凝視め、脚は不自然に曳きずられてゐた。

先刻の草原の處迄來ると、お才は其處に人が居るかのやうにギヨツとして急に立ち停つて、それから拔き足で其の前を通つた。

『ホホホホホ。』

けたゝましい笑ひ聲が四邊に響いた。

お才は唄を唄ひ出した。

（二）

狂亂したお才の姿が、長崎の町をあつち、こつち歩いたりした。

それを見て、心から同情する代りに、人々は嘲り笑ふのだつた。

『男を騙した罰が中つたのぢや。』

お才は男を騙したであらうか？

ある日、大浦のお慶さんは、乘馬服で、例の白馬に跨がつて海岸を勢よくやつて來

ると、子供に跡をつけられ、素足で衣物の裾を地に曳きずつて歩いて來た狂女がお才だつたので吃驚して馬から飛び降りた。

『お才ちやん、お前さんはまア――』

お慶さんは兩手をお才の肩に當てゝ搖すぶつたが、お才は體をグナ〳〵させるばかりで、何んの反應もなかつた。

『お才ちやん、妾が分らないの。』

『分るわ。』

『えツ、分つたの?』

『參らうや、參らうや

バライソの寺は

參らうやバライソの

寺とは申すれど

廣い寺とは申すれど……』

お才はそんな唄を歌ひ乍らフラ〳〵歩き出した。

お慶さんは其の姿を見送つて、泪ぐみながら獨り言を云つた。

『あの娘はあんまり正直過ぎたんだよ。』

×

其の晩は月が照つてゐた。

山上のグラバ氏の邸宅には大夜會が開かれてゐた。燈火は龍宮のやうに輝いてゐた。

其處では華やかな音樂や舞踏が行はれてゐた。

其の時、山の上とは反對に淋しい大浦の海岸を歩いてゐるのはお才だつた。お才は南へ南へと歩いてゐた。

町端れにあつたホテル・ハリマヤの家は、其の儘殘つてゐたが、看板はとうの昔から無くなつて今では全く別の人が住んでゐた。あの奇體な人物であるハリマヤの亭主だの、

そこへ賣られて來たおみさなどは何處へ行つてしまつたのか、誰も知つてゐる者はなかつた。

港を照らしてゐる月は、鏡のやうに明るかつた。お才の姿も其の月光の中に溶け込んでしまつて、遠くから見ると其の體が透き通つてゐるやうに見えた。

お才は、崖つぷちに佇んで凝と海の中を見入つてゐた。小さな波が月の光を受けてキラ〳〵光つてゐた。

お才の眼には、海の中に立つてゐる正克の姿が見えた。それは昔の儘の正克だつた。

『おゝ！　正克樣。』

お才の顏は、絕えて久しく見られなかつた歡喜のために全く蕩けて了ひさうに見えた。

彼女は今や完全に幸福だつた。

海が、彼女を呑んで了つた。けれども、地上にも、水上にも、何事も起らなかつたやうに、美しい月の光だけがあつた。

昭和九年十一月十九日印刷
昭和九年十一月二十三日發行

印刷　『唐人お才』奥附
發行　定價一圓五十錢

著作者　村松梢風

發行者　東京市京橋區京橋三ノ一　千倉豐

印刷者　東京市神田區神保町三ノ二九　山縣精一

發行所　東京・京橋第一相互館　千倉書房　振替東京九七八　電話京橋(56)三八一七一一八一一六五

山縣製本印刷株式會社印刷

村松梢風著

人間苦闘史

價一圓五十錢
送料十二錢

斯くして、彼等は世に勝てり。その苦闘の跡に學べ!!

いつの世に於いても、偉大なる事業は、僥倖によつては、達成せず、雄偉なる人物は、順境・無風の樂園からは生れない。

本書に登場して來る人々は、困難の多き世を以つて、己の志を鍛える道場とし、迫り來る障害を以つて、己の智慧を深くする肥料として、伸び進みし人々のみ。

著者の正しき資料と流麗の記述は、偉大なる人格、前人未到の事業、雄偉獨特の藝術を開拓し、創造せる各方面の苦闘成功者の全き姿と刻苦の跡を描き盡して、餘す所なし。しかも、これこそは、人間の意志の世界を藝術化せる唯一の書だ。志を抱く者は讀むべし。目的の途上において、たぢろぎ易き者は讀むべし。

東京・第一　千倉書房　振替東京九七八
京橋・相互館

◇味讀推奬書◇

不惑の人生觀	【卅版】	不安をのり越ゆる道はこの惑はざる人生觀あるのみ。	本莊可宗著	價一・五〇 送料・一〇
貧者必勝	【二十版】	貧者必勝の理を說く卒直素朴なる博士の東洋的信念の告白。	京・九大教授 文學博士 高田保馬著	價一・六〇 送料・一二
山水と歷史	【五版】	東西春秋折に觸れ、時に應じた自然と人生錄の一大集成篇!	白柳秀湖著	價一・八〇 送料・一四
激動期に生く	【五版】	無常迅速の現代諸相を見、其處に生きぬく道を語る。	清澤洌著	價一・五〇 送料・一〇
思ひ出を語る	【三版】	現代日本の三重臣の面目躍如たる回憶の三重奏!	齋藤實 高橋是清 岡田啓介述	價一・〇〇 送料・〇八
最後に笑ふ者	【三版】	ヒットラ革命に關する秘話とその史論。	朝日新聞獨逸特派員 黑田禮二著	價一・五〇 送料・一〇
思想・人物・時代	【十七版】	轉換期の近代日本!!我々の疑問に答へるのが本書だ!!	土田杏村著	價一・五〇 送料・一〇
明日に呼びかける	【四版】	明朗日本の更生を望む者のために書かれた書。	土田杏村著	價一・五〇 送料・一〇

著者	書名	定價	送料
高田保馬著	價格と獨占	價二・三〇	送料・一二
勝正憲著	稅の話（十三版）	價一・五〇	送料・〇八
那須皓著	日本農業論（絕版）	價二・五〇	送料・一五
高橋亀吉著	資本主義頽廢の諸相	價二・二〇	送料・一二
美濃部達吉著	行政裁判法	價二・八〇	送料・一八
小泉信三著	マルクシズムとボルシエギズム（再版）	價二・三〇	送料・一二
小島精一著	日本金融資本論（再版）	價二・五〇	送料・一二
報知新聞調査部編	談話室（四版）	價一・五〇	送料・一〇
高橋亀吉著	實用經濟學（五版）	價一・八〇	送料・一二
平林初之輔著	文學理論の諸問題	價一・八〇	送料・一二
井上準之助著	國民經濟の立直と金解禁（二百版）	價・三〇	送料・〇四
河合榮治郎著	英國勞働黨のイデオロギー	價・五〇	送料・〇四
清澤洌著	轉換期の日本（五版）	價一・八〇	送料・一二
東京日日學藝課編	常識百話（五版）	價一・五〇	送料・〇八
白柳秀湖著	日本經濟革命史（五版）	價一・八〇	送料・一〇

著者	書名	定價	送料
小島昌太郎著	海運經濟要論	價二・五〇	送料・一二
水上鐵治郎著	英國の勞働組合	價・五〇	送料・〇四
小島精一著	産業合理化（十五版）	價一・五〇	送料・一八
向井鹿松著	經營經濟學總論（十二版）	價一・五〇	送料・一八
上野陽一著	産業能率論（十二版）	價一・五〇	送料・一八
松永安左衛門著	産業改造への途（五十版）	價・八〇	送料・〇六
白柳秀湖著	親分子分（英雄編）（十版）	價一・五〇	送料・一〇
高橋亀吉著	『經濟國難來』（五版）	價一・五〇	送料・一〇
報知新聞調査部編	談話室漫談篇（五版）	價一・五〇	送料・一〇
平林初之輔著	近世社會思想講話	價一・八〇	送料・一〇
永井亨著	社會の話（五版）	價一・五〇	送料・一〇
中川靜著	廣告論	價一・五〇	送料・一八
山川均著	社會主義の話（六版）	價一・五〇	送料・一〇
白柳秀湖著	親分子分（俠客編）（七版）	價一・五〇	送料・一〇
大崎厚夫著	世界を動かす十二傑（五版）	價一・五〇	送料・一〇

著者	書名	定價	送料
勝正憲著	所得稅の話（七版）	價一・六〇	送料・一〇
報知新聞經濟部編	能率增進時代（五版）	價一・五〇	送料・一〇
福田敬太郎著	市場論（九版）	價一・五〇	送料・一八
政經研究會編	各政黨の主張（三十版）	價・三〇	送料・〇四
土田杏村著	文明は何處へ行く（五版）	價一・五〇	送料・一〇
增地庸治郎著	企業形態論（八版）	價一・五〇	送料・一八
小島精一著	世界經濟と合理化運動（五版）	價一・五〇	送料・一〇
白柳秀湖著	親分子分（浪人編）（七版）	價一・五〇	送料・一二
小林行昌著	賣買論（九版）	價一・五〇	送料・一八
石濱知行著	アメリカ資本主義發達史（四版）	價一・七〇	送料・一〇
小林行昌著	關稅と物價	價二・五〇	送料・一八
末弘嚴太郎共野間海造編	農林法規集	價五・〇〇	送料・二四
小島精一著	企業統制論（七版）	價一・五〇	送料・一八
神長倉眞民著	財界巡禮記（五版）	價一・五〇	送料・一〇
報知新聞調査部編	ナンセンス・ジャパン（五版）	價一・五〇	送料・一〇

著者	書名	定價	送料
長野朗著	支那の眞相（五版）	價一・五〇	送料・一〇
武野藤介著	文士の側面裏面（五版）	價一・五〇	送料・一〇
上野陽一著	能率祕話（十二版）	價一・五〇	送料・一〇
中外經濟商業部編	經濟國難打開の途（五版）	價一・五〇	送料・一〇
細田民樹著	黑の死刑女囚（五版）	價一・五〇	送料・一〇
藤井悌著	英國勞働黨の組織・沿革・政策	價・五〇	送料・〇四
藤本幸太郎著	海上保險論（七版）	價一・五〇	送料・一八
上野陽一著	家庭經濟の祕訣（十版）	價・九〇	送料・〇八
勝正憲著	企業と租稅（七版）	價一・五〇	送料・一八
報知新聞經濟部編	經濟相談（十版）	價一・五〇	送料・一〇
堀眞琴著	國家論	價二・三〇	送料・一四
堀光龜著	海運（八版）	價一・五〇	送料・一八
增井幸雄著	陸運（七版）	價一・五〇	送料・一八
山川均著	勞働組合の話（四版）	價一・五〇	送料・一〇
世界經濟研究所編	世界經濟（總觀）（七版）	價一・五〇	送料・一四

著者	書名	定價	送料
前田美稻著	豫算の知識（三版）	一・五〇	一〇
佐藤弘著	世界經濟地理（八版）	一・五〇	一八
米野豐實著	サウエート經濟の實體	一・五〇	一〇
中村第三著	販賣革命（六版）	一・二〇	一〇
高木友三郎著	日本經濟の實體（四版）	一・〇〇	一〇
勝田貞次著	投資相談（十五版）	一・五〇	一〇
勝田貞次著	獨逸財界の機構（三版）	一・八〇	一〇
小池四郎著	社會主義か資本主義か	一・二〇	一〇
大辻司郎著	漫談集	一・〇〇	〇八
白柳秀湖著	社會展開の動力（三版）	一・六〇	一〇
上田貞次郎著	商工經營（十版）	一・五〇	一八
山田忍三著	百貨店經營と小賣業	一・五〇	一〇
後藤朝太郎著	哲人支那	一・五〇	一〇
報知新聞調査部編	ユーモア百話（六版）	一・五〇	一〇
小島精一著	アメリカ恐慌の見透し	一・〇〇	〇六
林恒彦著	生活指導	一・五〇	一〇
帝國大學新聞編輯部編	大學の運命と使命	一・五〇	一〇
清澤洌著	アメリカを裸體にす（十三版）	一・五〇	一〇
三邊金藏著	會計監査（八版）	一・五〇	一八
北林惣吉著	淺野總一郎傳（十版）	一・五〇	一〇
報知新聞經濟部編	中小産業の活路	一・八〇	一二
勝田貞次著	不景氣時代の投資法（十版）	一・五〇	一〇
白柳秀湖著	食慾と愛慾（六版）	一・六〇	一〇
勝正憲著	營業收益税の話（八版）	一・五〇	一〇
國松豐著	工場經營論（六版）	一・五〇	一八
青野季吉著	實踐的文學論	一・六〇	一〇
北野大吉著	婦人運動の開祖メリー・ウオルストンクラフト	一・五〇	一〇
小汀利得著	街頭經濟學（十九版）	一・五〇	一〇
近松秋江著	文壇三十年	一・八〇	一〇
北林惣吉著	淺野翁夫人正傳 女の一心	一・二〇	一〇

著者	書名	定價	送料
野守廣 内藤章著	信託經營論	一・五〇	一八
木村毅著	巴里情痴傳（五版）	一・五〇	一〇
宮川貞一郎譯	金本位制度の理論と實際	一・三〇	一〇
佐々弘雄著	政治の貧困	一・五〇	一〇
北林惣吉著	淺野翁物語 成功祕談	一・五〇	一〇
井關孝雄著	金融の常識（七版）	一・五〇	一〇
白柳秀湖著	住友物語（十二版）	一・五〇	一〇
小林新著	經營統計（七版）	一・五〇	一八
山崎靖純著	何が財界を動かすか（九版）	一・五〇	一〇
北林惣吉著	投資基礎學（四版）	一・五〇	一〇
内池廉吉著	倉庫論（七版）	一・五〇	一八
清澤洌著	不安世界の大通り（九版）	一・五〇	一〇
勝田貞次著	投資の仕方（三版）	一・五〇	一〇
木村毅著	ラグーザお玉（五版）	一・八〇	一〇
報知新聞經濟部編	財界を牛耳る人々（九版）	一・五〇	一〇
高橋亀吉著	景氣はドウなる（九版）	一・五〇	一〇
勝田貞次著	景氣の見方（三版）	一・五〇	一〇
福田敬太郎著	商業概論（六版）	一・五〇	一八
太田哲三著	銀行簿記の常識（五版）	一・〇〇	一〇
上野陽一著	販賣心理（五版）	一・五〇	一八
都新聞峰島編	法律相談（六版）	一・五〇	一〇
都新聞峰島編	衛生相談（五版）	一・五〇	一〇
アインチヒ山本米治譯	國際金融爭覇戰（七版）	一・〇〇	一〇
報知新聞經濟部編	小資本開業案内（六版）	一・五〇	一〇
藤田國之助著	取引所論（五版）	一・五〇	一八
黒澤清著	商業簿記の常識（五版）	一・〇〇	一〇
山崎靖純著	マーヴア景氣はドウなる（五十九版）	一・三〇	〇四
半野憲二著	世界市場を脅かすロシア五ケ年計畫（廿五版）	一・五〇	〇四
國民新聞政治部編	明日を待つ彼	一・五〇	一〇
中外商業商店欄編	尖端的販賣戰術（五版）	一・五〇	一〇

著者	書名	定價	送料
中野正剛著	沈滯日本の更生（五十版）	〇・三〇	〇・〇四
井關十二郎著	販賣の常識	一・〇〇	〇・一〇
坂口武之助著	商品學	一・五〇	〇・一八
小林行昌著	商業算術の常識（五版）	一・〇〇	〇・一〇
山川均著	無產政黨の話（三版）	一・五〇	〇・一〇
加藤三郎譯	世界商業祕話	一・六〇	〇・一〇
アインチヒ著 木村禧八郎譯	世界經濟恐慌の解剖（五版）	一・二〇	〇・一〇
高島佐一郎著	金融統制論	一・五〇	〇・一八
白柳秀湖著	日本富豪發生學 下士階級革命の卷	一・六〇	〇・一〇
デニー著 香月保譯	アメリカの世界經濟征服（八版）	一・五〇	〇・一〇
松本烝治著	商法改正の話 公認としての	〇・五〇	〇・〇四
本多熊太郎著	日本の立場（五十版） 世界の動きと	〇・三〇	〇・〇四
木村禧八郎著	金本位制の危機（卅五版）	〇・三〇	〇・〇四
金子利八郎著	事務管理總論	一・五〇	〇・一八
佐藤弘著	商品學の常識	一・〇〇	〇・一〇
佐々木道雄著	商業數學	一・五〇	〇・一八
中島徹三譯 ホブソン著	世界經濟の統一	一・〇〇	〇・一〇
吉田良三著	會計學の常識	一・〇〇	〇・一〇
後藤朝太郎著	支那の民情（廿版） 時代を統らす	〇・三〇	〇・〇四
同著	列强の侵略戰（廿版） 滿蒙に於ける	〇・三〇	〇・〇四
同著	滿蒙併呑か獨立？（廿版）	〇・三〇	〇・〇四
長野朗著	暗雲たゞよふ滿蒙（廿五版）	〇・三〇	〇・〇四
武藤山治著	金輸出再禁止（百版） 景氣轉換策としての	〇・三〇	〇・〇四
長野朗著	動亂支那の眞相	一・〇〇	〇・一〇
パッターソン著 伊地知軍司譯	列强經濟のヂレンマ	一・二〇	〇・一〇
ベンネット著 森田敏譯	人生如何に生くべきか	一・〇〇	〇・一〇
小松綠著	維新革命祕話	二・〇〇	〇・一四
内池廉吉著	商業學の常識	一・〇〇	〇・一〇
藤本幸太郎著	商業統計の常識	一・〇〇	〇・一〇
村瀨玄著	工業會計の常識	一・〇〇	〇・一〇

著者	書名	定價	送料
コール著 清水元壽譯	經濟の國家統制（五版）	二・〇〇	〇・一六
高島佐一郎著	金本位制動搖と日本金融の將來（八版）	一・二〇	〇・一〇
原口亮平著	簿記學	一・五〇	〇・一八
白柳秀湖著	日本富豪發生學 閥族財閥爭奪の卷	一・六〇	〇・一四
小原喜三郎譯	物富み人富まざるの矛盾	一・〇〇	〇・一〇
高橋亀吉著	日本經濟の變革（七版） 世界破局と	一・五〇	〇・一四
保科貞次著	空襲!!（廿版）	一・〇〇	〇・一〇
猪谷善一著	アジヤ經濟の展望	一・五〇	〇・一〇
洪純一 モールトン著	日本財政經濟論（四版）	三・〇〇	〇・一四
伊豆富人著	安達さんの心境を語る（八十版）	〇・三〇	〇・〇四
森田久著	弗賣買の解剖（百版）	〇・三〇	〇・〇四
平井泰太郎著	經營學文獻解說	一・五〇	〇・一八
中野正剛著	轉換日本の動向（廿版）	〇・三〇	〇・〇四
アインチヒ著 木村禧八郎譯	世界金融恐慌の眞相	一・二〇	〇・一〇
井上準之助著	金再禁止と我財界の前途（百版）	〇・三〇	〇・〇四
小汀利得著	漫談經濟學（卅五版）	一・五〇	〇・一〇
中外商業新報社編	政治家群像（五版）	一・五〇	〇・一〇
上野陽一著	經營作戰（七版）	一・五〇	〇・一〇
森山四郎著	滿蒙小資本開業案內（卅版）	一・二〇	〇・一〇
高木友三郎著	東亞モンロー主義への驀進（廿版）	〇・三〇	〇・〇四
佐々木良雄著	販賣祕法	一・五〇	〇・一〇
平井泰太郎著	經營學の常識（四版）	一・〇〇	〇・一〇
ロオレンス著 渡邊進譯	此の金恐慌（五版）	一・二〇	〇・一〇
勝田貞次著	相場戰術（十五版）	一・八〇	〇・一〇
武藤山治著	我財界の緊急對策 インフレーションとは何か？	〇・五〇	〇・〇四
高垣寅次郎 金子弘著	產業心理學	一・五〇	〇・一八
報知新聞 經濟部編	滿洲國の開發 と日本經濟の動向	一・二〇	〇・一〇
宇野木忠著	伯樂＝澁澤翁（十版）	一・〇〇	〇・〇八
高橋亀吉著	變革期の財界と其對策（九版）	一・五〇	〇・一〇
報知新聞 經濟部編	相場實話（五版）	一・五〇	〇・一〇

著者	書名	定價
白柳秀湖著	現代財閥罪惡史(卅版)	價一・六〇 送料・一〇
土田杏村著	現代世相論(廿版)	價一・五〇 送料・一〇
河合良成著	非常時の經濟對策(七萬)	價〇・三〇 送料・〇四
小島精一著	日本計畫經濟論(十版)	價一・八〇 送料・一二
木村毅著	S・O・Sのアメリカ	價一・五〇 送料・一〇
勝田貞次著	富の分布か新平價か?	價一・五〇 送料・一〇
ベーシュ著 加藤直士譯	景氣轉換論	價一・二〇 送料・一〇
橫尾惣三郎著	農村非常對策(廿萬)	價〇・三〇 送料・〇四
マハン大佐著 尾崎中佐譯	米國海軍戰略	價二・五〇 送料・二二
長崎英造譯	歷史は繰返すか	價〇・三五 送料・〇四
高橋亀吉著	經濟學の基礎知識(十五版)	價一・五〇 送料・一二
山道襄一著	日本再建論(十萬)	價〇・三〇 送料・〇四
谷口吉彥著	購買力補給案(十五版)	價一・五〇 送料・一二
平井泰太郎著	經營學入門	價二・三〇 送料・一四
上野陽一著	計畫經濟と管理法	價一・五〇 送料・一〇
高島佐一郎著	金本位の後に來るもの(八版)	價一・八〇 送料・一二
增地庸治郎著	商業通論	價一・五〇 送料・一八
山本勝市著	經濟計算	價一・五〇 送料・一〇
山崎靖純著	圓爲替はどうなる(卅版)	價〇・三〇 送料・〇四
小原喜三郎著	南北分水嶺を越えて	價一・〇〇 送料・〇八
白柳秀湖著	親分子分(政黨編)	價一・五〇 送料・一〇
勝正憲著	相續稅の話	價一・五〇 送料・一〇
安部磯雄著	產業奉還論	價〇・三〇 送料・〇四
尾崎行雄著	世界審判の岐路に立つ日本	價〇・三〇 送料・〇四
清澤洌著	アメリカは日本と戰はず(廿版)	價一・五〇 送料・一二
高橋亀吉著	景氣轉換期	價一・五〇 送料・一二
小島精一著	日滿經濟ブロック問答	價〇・三〇 送料・〇四
藤山雷太著	鮮支遊記	非賣品
野村證券調査部	爲替低落と上向期の主要產業	價二・三〇 送料・一二
喜多壯一郎著	ジャアナリズムの理論と現象	價一・五〇 送料・一〇

著者	書名	定價
宇原義豐著	日本產業革命論	價二・〇〇 送料・一四
佐々弘雄著	政局危機の動向	價一・五〇 送料・一〇
マツケンナ著 前馬治一著	金融政策十四年	價一・五〇 送料・一〇
白柳秀湖著	日本外交の血路(九版)	價一・五〇 送料・一〇
白柳秀湖著	『親分子分』英雄編(普及版)	價一・〇〇 送料・一〇
白柳秀湖著	『親分子分』俠客編(普及版)	價一・〇〇 送料・一〇
白柳秀湖著	『親分子分』浪人編(普及版)	價一・〇〇 送料・一〇
太田哲三著	會計制度論	價一・五〇 送料・一八
勝田貞次著	1933 投資相談(六十五版)	價一・五〇 送料・一〇
山川均著	世相を語る XYZの對話	價一・五〇 送料・一〇
土田杏村著	思想・人物・時代(十五版)	價一・五〇 送料・一〇
中外商業 商店欄編	經營祕話	價一・五〇 送料・一〇
清水芳太郎著	日本經濟革命論(八版)	價一・五〇 送料・一〇
山崎幸四郎編	農村副業と共同販賣	價一・五〇 送料・一〇
小汀利得著	金より物へ(七十五版)	價一・五〇 送料・一〇
モンカド著 清澤洌著	亞細亞モンロー主義(六版)	價一・五〇 送料・一〇
岡地與四松著	インフレ景氣論(五版)	價一・五〇 送料・一〇
上野陽一著	能率百話(八版)	價一・五〇 送料・一〇
高橋亀吉著	非常時經濟(十五版)	價一・五〇 送料・一〇
鎌田澤一郎著	朝鮮は起ち上る(廿版)	價一・五〇 送料・一〇
谷口吉彥著	爲替理論と爲替問題(廿版)	價二・三〇 送料・一四
清澤洌著	非常日本への直言(六版)	價一・五〇 送料・一〇
勝田貞次著	金本位恐慌後の投資對策(十二版)	價一・五〇 送料・一〇
小島精一著	金融恐慌論(十版)	價一・五〇 送料・一〇
木村毅著	世界の女性を語る	價一・五〇 送料・一〇
畑桃作著	國策を守れ	價〇・五〇 送料・〇四
佐々弘雄著	街頭政治讀本	價一・五〇 送料・一〇
黑田禮二著	革命三人男	價一・五〇 送料・一二
澤田謙著	獨裁期來!	價一・五〇 送料・一〇
高橋亀吉著	清算期世界經濟と日本	價一・五〇 送料・一〇
白柳秀湖著	左傾兒とその父	價一・五〇 送料・一〇
室伏高信著	マルクスを乘り越えて	價一・五〇 送料・一〇

久保久治著	金融革命宣言	價一・二〇	送料・一〇
高島佐一郎著	金融景氣とその限界	價一・五〇	送料・一〇
佐々木良雄著	科學的商店經營法（卅五版）	價一・五〇	送料・一〇
黑田禮二著	最後に笑ふ者	價一・五〇	送料・一〇
上野陽一著	能率茶話	價一・五〇	送料・一〇
勝田貞次著	投資祕話（廿五版）	價一・五〇	送料・一〇
黑澤清著	會計學（三版）	價二・五〇	送料・一四
保科貞次著	空襲（普及版）	價・八〇	送料・〇八
渡邊進著	ハツ・世界經濟新體系論トン	價一・二〇	送料・〇八
平井泰太郎著	經濟座談	價一・五〇	送料・一〇
小島精一著	世界危機一九三六年！（卅版）	價一・五〇	送料・一〇
小島昌太郎著	日本金融工作論（再版）	價一・五〇	送料・一〇
菅谷北斗星著	棋道祕話（十一版）	價一・五〇	送料・一〇
白柳秀湖著	世界經濟鬪爭史（再版）	價一・六〇	送料・一二
清水芳太郎著	金力・權力・武力	價一・二〇	送料・一〇
田中滿三著	科學的工場經營法（再版）	價二・〇〇	送料・一四
上野陽一著	能率文明論	價一・五〇	送料・一〇
小島精一著	日本經濟の伸展性	價一・六〇	送料・一四
細野孝一著	各國インフレーション形態の研究	價三・〇〇	送料・一四
關根郡平著	將來の海軍問題	價一・〇〇	送料・一〇
三田同學會著	國際經濟戰略（三版）	價二・〇〇	送料・一四
白柳秀湖著	日本女性史話（五版）	價一・五〇	送料・一〇
小島經濟研究所著	膨張財政の建設的役割	價一・三〇	送料・一〇
勝田貞次著	平價切下に備へよ（四百版）	價一・〇〇	送料・一〇
黑田禮二著	金世紀の始まる頃	價一・八〇	送料・一二
木村毅著	西鄕南洲（七版）	價一・六〇	送料・一二
渡邊銕藏著	中小商工業死活の問題	價・五〇	送料・〇四
茂木惣兵衞著	來るべき世界の姿	價一・五〇	送料・一二
勝田貞次著	雜株投資案內（十五版）	價一・五〇	送料・一〇
高橋亀吉著	世界資本主義の前途と日本（三版）	價一・五〇	送料・一〇
中外商業經濟部著	日本商品の話（十二版）	價一・六〇	送料・一二
岩井良太郎著	財界新鬪將傳（九版）	價一・五〇	送料・一〇
尾崎行雄著	近代快傑錄（六十版）	價一・二〇	送料・一〇
村本福松著	經營學原論	價一・五〇	送料・一四
大野木繁太郎著	世紀の支配者ハースト	價一・五〇	送料・一〇
白柳秀湖著	維新革命前夜物語	價一・五〇	送料・一〇
坂口二郎著	現代新聞論	價一・五〇	送料・一〇
谷口吉彥著	日本經濟の進出と經濟國策の將來	價一・二〇	送料・一〇
高島佐一郎著	新貨幣金融論	價二・二〇	送料・一四
畑石輝治著	工業經濟の話	價一・五〇	送料・一〇
高橋亀吉著	ソシアル・ダンピング論	價一・五〇	送料・一〇
小笠原秀昱著	法城崩る	價一・五〇	送料・一二
高橋亀吉著	實踐金融論	價二・五〇	送料・一四
報知新聞經濟部著	景氣と相場の見方	價一・二〇	送料・一〇
木村禧八郎著	圓・弗・磅・法の話	價一・八〇	送料・一四
岩井良太郎著	三井・三菱物語	價一・五〇	送料・一〇
深尾須磨子著	マダム・Xと快走艇	價一・〇〇	送料・一〇
清澤洌著	激動期に生く	價一・五〇	送料・一〇
室伏高信著	現代文明講話	價・一五〇	送料・一〇
栗林正修著	投資者必携（再版）	價一・五〇	送料・一〇
具島兼三郎著	ファシスト國家論	價一・五〇	送料・一〇
谷口吉彥著	國際經濟の理論と問題	價二・五〇	送料・一四
吉村觀水著	觀相科學（十五版）	價一・五〇	送料・一〇
ジョンソン著	英帝國の野心	價一・〇〇	送料・一〇
佐々木良雄著	實益的商店經營學	價一・五〇	送料・一〇
中野正剛著	國家改造計畫綱領（百版）	價・五〇	送料・〇四
清水芳太郎著	古今偉人會議	價一・三〇	送料・一〇
東京商工會議所調査部編	明日の貨幣（卅版）	價一・〇〇	送料・〇八
仲西初五郎著	商賣のコツ（廿五版）	價一・五〇	送料・一〇
清澤洌著	革命期のアメリカ經濟	價一・五〇	送料・一〇
竹內謙二著	貿易統制論	價二・五〇	送料・一四
久原房之助著	皇道經濟論（七十八版）	價・三〇	送料・〇四
土田杏村著	明日に呼びかける	價一・五〇	送料・一〇
勝田貞次著	一九三四年投資相談	價一・五〇	送料・一〇

著者	書名	定價 送料
白柳秀湖著	山水と歴史	價一・八〇 送料・一二
杉山茂著	日本式收支簿記	價一・〇〇 送料・一〇
栗栖赳夫著	商法の常識	價一・〇〇 送料・一〇
小島精一著	岡田內閣と一九三五年	價一・五〇 送料・一〇
高田保馬著	貧者必勝	價一・六〇 送料・一二
鎌田澤一郎著	滿洲移民の新らしき道	價一・二〇 送料・一〇
溝呂木光治 菅谷北斗星著	將棋相談	價一・五〇 送料・一〇
齋藤恒之助著	軍擴景氣の發展と投資法	價一・五〇 送料・一〇
木本龍太郎著	景氣變動の見方	價一・五〇 送料・一〇
澤村克人著	米高と繭安の見方	價一・〇〇 送料・一〇
讀賣新聞編著	思ひ出を語る	價一・〇〇 送料・一〇
末高信著	生命保險の常識	價一・〇〇 送料・一〇
前田梅松著	利廻相談	價一・五〇 送料・一〇
安川雄之助著	產業貿易觀	價一・五〇 送料・一〇
高田琴三郎著	明日の小賣店經營	價一・二〇 送料・一〇

著者	書名	定價 送料
白柳秀湖著	日本民族論	價一・五〇 送料・一〇
和田日出吉著	福澤諭吉と弟子達	價一・五〇 送料・一〇
本莊可宗著	不惑の人生觀	價一・五〇 送料・一〇
村松梢風著	人間苦鬪史	價一・五〇 送料・一〇
芳野國雄著	貿易爲替計算の常識	價一・〇〇 送料・一〇
鱒田豐治朗著	生命保險論	價一・五〇 送料・一四
清水芳太郎著	日本產業戰略	價一・五〇 送料・一〇
高橋龜吉著	滿洲經濟と日本經濟	價一・五〇 送料・一〇
波多野鼎著	景氣論	價二・〇〇 送料・一四
岩井良太郎著	日本獨占產業物語	價一・五〇 送料・一〇
上野陽一著	人を說く法	價一・五〇 送料・一〇
板橋菊松著	社債の實際知識	價一・六〇 送料・一二
村松梢風著	唐人お才	價一・五〇 送料・一二

568
473

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black